

難病リハビリ 遠隔指導

札幌、理学療法士が講師



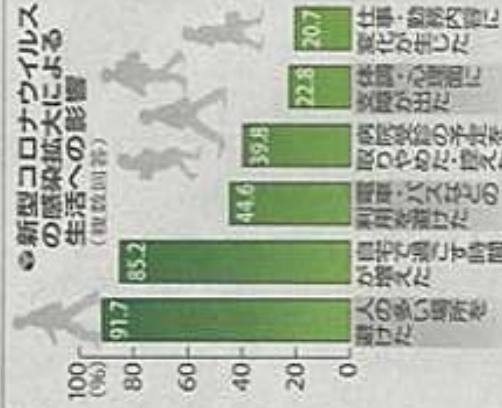
Zoomで理学療法士の指導を受けながらストレッチをする増田代表理事(8月19日、札幌市中央区で)。佐々木紀明撮影

札幌市中央区の北海道病態シスターの一室で8月

新型コロナウイルスの感染が広がる中、難病を患った人が院内感染を恐れ、リハビリのための通院に不安を抱えている。健康なより免疫力が落ちやすいことから感染するリスクが高いため、リハビリは力や筋力の維持に欠かせないことから、関係団体が自宅でもできるようにオンラインを使った取り組みを進めている。

■Zoom活用

一般団体の北海道難病代表理事の増田清子さん(61)が「Zoomシステム」を使い、不



新型コロナウイルス感染に対する難病患者の思いは切実だ。自身の病気が徐々に衰える筋ジストロフィー患者の千歳市の男性会社員(51)は、4月に院内感染が起きたニュースを見て待合室にいることすら怖くなり、リハビリのための通院ができなくなった。

自宅でストレッチをして体

筋ジストロフィー患者ら

約2か月後の夜中に心臓をつままれるような痛みを感じ、このままでは心不全を起してしまいかない」と悩みながらも翌日から通院を再開した。男性はこれからの寒い季節

「感染への不安拭えない」

北海道難病連が会員を対象に実施した新型コロナウイルスに関するアンケートで、生活への影響を複数回答で尋ねたところ「病院受診の予定を取りやめた・控えた」とした人は全体の39.8%に上った。また「体調・心理面に支障が出た」は、8%に上った。

感染への不安感についての質問は「不安と答えた人は「非常に不安」と「やや不安」を合わせると58%に上った。自由記述欄には「勤務先がクリニックをしてお

り「新型コロナウイルス感染し働きなくなるのが一番の不安」と打ち明けた。仕事は事務職医師からは不安やストレスから症状が悪化する懸念がある」と目頭から涙を流しながら言われている。女性は「せめて娘の大学卒業まではフルタイムで働きたい。これ以上病気が悪化するお

コロナ懸念、患者通院控え

参加した補綴科のペースンン病患者ら約15人が手足を大きく動かす練習が映っていた。

企画したのは、自身の背骨の中にある後縦棘が骨のように硬くなり、神経などを圧迫する後縦棘骨化症という難病を患う増田さん。かかりつけの病院が

4月、感染対策としてリハビリ患者の受け入れを休止したため「困っていたが、いざなぎ」とも月から月入るペースで続けている。増田さんは4歳の時に足にじびれや痛みの症状が表れた。車いす生活を余儀なくされたが、リハビリにのみ1年後はつえをつけ、歩行は少しできるようになった。「リハビリは自分が望む生活水準を実現させるための頼みの綱だ」と強調する。

■触れられず限界も

オンラインでのリハビリは月2回目に行き、20人が参加した。参加者には好評で、「まだ外出しづらく、自宅で座っていることが多いので腰痛に悩んでいる」「通院の転倒防止に役立つ術を知りたい」といった声があがられた。

受診控えた取りやめ4割

北海道難病連が会員を対象に実施した新型コロナウイルスに関するアンケートで、生活への影響を複数回答で尋ねたところ「病院受診の予定を取りやめた・控えた」とした人は全体の39.8%に上った。また「体調・心理面に支障が出た」は、8%に上った。

ず、公共交通機関を使わない通勤が不安や「親が感染した際、隣室を控える手の預け先をどうするか」などの課題も挙げられた。北海道難病連は道内の33疾病団体が加盟するアンケートは8月、患者や家族ら約700人の会員の中から無作為に選んだ100人に郵送し、54人が回答を得た。

講師を務める理学療法士の佐々木雄二さん(39)は取材に対し「リハビリを通じて患者とコミュニケーションを図るとは重要だが、オンラインではほかに触れ合うことができない。限界も感じる」と吐露する。症状には個人差があるため、「かかりつけ医や行政が協力し、それぞれの患者の状況に合わせた対応を計画しておく必要がある」と語った。